



Industrial Arts

これはもうただの釣り竿ではない…

橋本のへら竿の人気の秘密…

知的な駆け引き へラブナ釣り

和歌山県の北東部に位置する橋本市は、へら竿作りにかけては日本一の町として知られている。

釣り竿といえばカーボン製が主流だが、へら竿だけは断然、竹製にかぎる。もつともへラブナはカーボンでも釣れるることは釣れる。しかし、「紀州へら竿」

を使うと、へラブナが水中で右へ左へ上へ下へと動きまわるその動きが、そのまま釣り人の手元まで伝わってくるという。この知的な駆け引きこそへラブナ釣りの醍醐味だ。

一万本の中の数本… 竹探しは宝探し

秋、竿師は竹探しのため紀伊山地のど真ん中、高野山系や大

台ヶ原あたりまで分け入る。「何億と生えている竹の中から、一日に採れるのは十本程度ですが、最終的にへら竿の材料として使えるのは、一万本の中の数本。竹を切り出すところから完成までたった一人の手作り、いや面白いですね…」、そう話す竿職人・城英雄さんは、紀州

聖地・橋本で行われる「へラワン・グランプリ」
橋本市はへら竿生産の全国シェア九〇%以上を誇る産地だが、現在、竿師は五十人あまり。組合では、次代の紀州へら竿師を養成する匠工房を昨年十月開設、四人が研修中だ。
最近では韓国・中国・台湾などでも大人気。また年一回全国のへラブナファンが聖地・橋本に集合する「全国へラブナ釣り選手権大会」が行われる。通称「HERA-1」。おしゃれでしょ？



HERA-1グランプリが行われる橋本市の隠れ谷池。普段は竿師たちの研究の場だ。

価格は3万円～100万円を超えるものも。ちなみにカーボン製は数百円から、高くても数万円まで。和歌山県伝統工芸品第一号に指定された工芸品。写真は取っ手の部分だが、糸を巻いたり漆を塗ったりと、各竿師の腕の見せ所でもある。



profile・城英雄さん
紀州製竿組合長。53才。名匠として知られる父・城純一に24才で入門。竿師にはそれぞれ銘があり父の銘が魚集、そして弟子でもある城氏の銘は魚集英雄。竹と対話をしながらの竿作りで独自の境地を開拓している。

「伝統はただ守るだけのものではないと思いますね。その時代の新しい技術と感性を取り入れながら引き継いでいくことが伝統だと思いますよ」。

橋本はへら竿生産の全国シェア九〇%以上を誇る産地だが、現在、竿師は五十人あまり。組合では、次代の紀州へら竿師を養成する匠工房を昨年十月開設、四人が研修中だ。
最近では韓国・中国・台湾などでも大人気。また年一回全国のへラブナファンが聖地・橋本に集合する「全国へラブナ釣り選手権大会」が行われる。通称「HERA-1」。おしゃれでしょ？

それでは日々、竹と格闘している城組合長の言葉に耳を澄ませてみよう。

「伝統はただ守るだけのものではないと思いますね。その時代の新しい技術と感性を取り入れながら引き継いでいくことが伝統だと思いますよ」。

製竿組合の組合長だ。

そしていよいよ竿作りが始ま

る。これには数百の工程がある

のだが、中でも曲がった竹をまっすぐにする「火入れ」に最

も神経を使う。七輪の火でじつくり焼きこむのだが、「竹との語らいの中で行うんですよ」と

城組合長。

聖地・橋本で行われる 「へラワン・グランプリ」

橋本はへら竿生産の全国

シェア九〇%以上を誇る産地だ

が、現在、竿師は五十人あまり。

組合では、次代の紀州へら竿師を養成する匠工房を昨年十月開設、四人が研修中だ。

最近では韓国・中国・台湾などでも大人気。また年一回全国

のへラブナファンが聖地・橋本に集合する「全国へラブナ釣り選手権大会」が行われる。通称「HERA-1」。おしゃれでしょ？

釣りは「マブナに始まり、ヘラブナに終わる」といわれる。それほどへラブナは釣り人にとって気難しく、手ごわい相手なのだ。へラブナ釣りの奥深さにとりつかれたへラブナファンは数知れず。誰もが優れた「紀州へら竿」を求めてやまない。